監獄部屋

羽志主水

青空文庫

（一）

同じ持場で働いて居る山田という男が囁いた。

「オイ、何でもナ、近けえ内に政府の役人の良い所が巡検に来るとヨ」

「エッ、本当かイ夫りゃア、何時だってヨ」

「サア、其奴ア判ら無えがナ、今度ア今迄来た様な道庁の木ッ葉役人たア違うから、何とか目鼻はつけて呉れるだろう、何時も何時も胡麻化されちゃア返るんだが、今度ア左様は往くめエ、然し之で万一駄目だとなりゃ、此世は真暗闇だぜ」

「左様サ、何しろ役人位えにアビクビク為ねえ悪党揃だからナ、今迄の木ッ葉役人は瞞かされたり、脅かされたり、御馳走されたりで追ッ払われたんだが、東京から大所が来ると成りゃ、今度ア、其手じゃア往かねえ、何しろ一日でも早く来て、俺ッちの地獄の責苦を何とかして呉れなけりゃ、余命ア幾何もありゃしねえや」

「マア、厳重吟味して圧制な……」

突然に近い所で、巨い声がした。

「何奴だア、何ヨグズグズ吐きゃアある、土性ッ骨ヒッ挫かれねエ用心しろイ」

帝釈天と綽名のある谷口という小頭だ。

「仕事の手を緩めて怠ける算段計り為てけツかる、互に話ヨ為て、ズラかる相談でも為て見ろ、明日ア天日が拝め無えと思え」

実際ウカウカして居ると容赦なく撲ったり、蹴倒したりするから、ダンマリで又労役に精を疲らす、然し烏渡鵜の目鷹の目の小頭、世話役の目の緩むのを見て同様の会話が伝わる、外の組へも、又其外の組へも、悪事じゃ無いが千里を走って、此現場中へ只た一日で噂は拡まる。

（二）

現場といっても、丸ノ内のビルジング建築場でも、大阪淀屋橋架換工事場でも、関門連絡線工事場でも無い。往年、鬼怒川水電水源地工事の折、世に喧伝された状況を幾層倍にして、今は大正の聖代に、茲北海道は北見の一角××川の上流に水力電気の土木工事場とは表向、監獄部屋の通称が数倍判りいい、此世からの地獄だ。

此所に居る自分と同じ運命の人間は、大約三千人と云う話だが、内容は絶えず替って居る。仕事の適否とか、労働時間とか、栄養とか、休養とかは全然無視し、無理往生の過激の労働で、人間の労力を出来る丈多量に、出来る丈短時間に搾り取る。搾り取られた人間の粕はバタバタ死んで行くと、一方から新しく誘拐されて、タコ誘拐者に引率されてゾロゾロやって来る。

三千人の内には、自己の暗い過去の影から逐われて自棄で飛込んで来るのもあるが、多くは

学生、店員、職工の中途半端の者や、地方の都会農村から成功を夢みて漫然と大都会へ迷い出た者が、大部分だから、頭は相応に進んで居て、理窟は判って居ても、土木工事の荒仕事には不向だ。加之圧搾機械の様な方法で搾られるんでは、到底耐ったもので無い。朝、東の白むのが酷使の幕明で、休息時間は碌になく、ヘトヘトになって一寸でも手を緩め様ものなら、午頭馬頭の苛責の鉄棒が用捨なく見舞う。夕方ヤット辿り着く宿舎は、束縛の点では監獄と伯仲でも、秩序や清潔の点では到底較べもので無い。監獄部屋の名称は、刑務所の方で願下げを頼み込むに相違ない。

搾り粕の人間の窶れ死は、まだまだ幸福な方で、社会―娑婆―で云えば国葬格だ。未だ搾り切れずに幾分の生気を剰して居る人間は、苦し紛れに反抗もする、九死に一生を求めて逃亡も企る。而も其結果は恒常、判で捺した様に、唯一の「死」。其死の形式は、斬殺、刺殺、銃殺は寧ろお情けの方で、時には鬱憤晴し、時には衆人への見せしめに、圧殺、撲殺、一寸試しや焚殺も行われる。徒党を組んだ失敗者は時に一緒に十五、六人鏖殺されたこともある。

此世界では斯る男性的な、率直な方法が、何の障碍も無く行われるので詐欺、放火、毒殺などの女性的な、迂曲い方法は流行らぬ、此世界では良心や温情は罪悪である、正義や涙は篦棒である。腕力、脅威が道徳で、隠忍、狡滑が法律である。殺人、傷害、凌辱、洞喝が尋常茶飯事で、何の理由も無く平気で行われ、平気で始末される、淫売窟に性道徳が発達しない如く、斯る殺人公認の世界には探偵小説が生じ得ない。

（三）

山田という男は、早稲田に居る内、過激思想にかぶれ、矯激な行動をやったので半途で抛り出された上、女の事から自棄になって、死ぬ積りで飛込んで来た丈に中々負けては居ないが、力づくでは何ともならぬ。思想の宣伝で行っ付けてやるのだと予々言って居て、随分自分も御説教を聞かされたものだ。夫でも虐待には熟々やり切れぬと見えて、

「来るッてエなア何時だろうナ、なまじ聞かされた丈に待遠うで仕方がねエ」

「御同様サ、今日聞き込んだが、二、三日前に這入って来たバツクの（東京下りのハイカラ）生ッ白れエ給仕上りの野郎に聞いたんだが、議会で政府のアラ捜しより能の無え議員が、大分鋭く監獄部屋の件で内務大臣に喰って掛ったそうな、責任塞げにでも、役人に調査材料を集めに派遣すのだとサ。何れ議会の開期中だから、左様遠くもあるめエ、然しネ、オイ、斯様一目瞭然の事実を山の鬼共はどう糊塗す積かナア、一寸思案が付かねエがナア」

「奴等は一筋縄でも十筋縄でも行かねエ悪党の寄集りだから、何れ直に御辞儀は仕まいが、俺などが来て随分鼓吹宣伝した為に第一此方等が今迄の人間見てエに黙らされちゃア居ねエ、思う存分役人の前でスッパ抜いてやるから、何と遣繰したって、どう辻褄が合うものかヨ、隣の飯場に居る玉の井の淫売殺しをやった木村ツてノッポが居るだろう、彼奴も誰が何と云おうと

喋舌り立ててやると言ってたサ、四、五人が先棒になって喋舌れば、後は皆元気付いて口が開けるだろう、左様すりゃ蜂の巣を突ッついた様なもんだ、二百や三百の上飯台の悪党共がジタバタしたって何様なるもんか、生命を投出してりゃ何アニ！」

　被害者の希望、歓喜は、虐待者の憂慮である。人々の希望が日を逐うて潮の如く高まると共に、上飯台の連中や幹部連の凄惨な顔色は弥々深くなる。只でも油断のない眼は耀を増し、耳は益々尖って来る。

「又今日も親方連は会議室へ集ってるが、念入と見えて、可成長くかかってるな。一番性の悪い、残酷な闇魔の親爺が、此二、三日の気の荒さッちゃ無えそうだ、だが独りぼッちになると時々溜息突いてるって話だ、余ッ程気になるんだろう」

「夫りゃア奴等だって悪い事たア百も承知の上だから気にもなりゃア、溜息も突こうサ……黙ッた黙ッた帝釈天だ」

「ヤイヤイ、此奴等ア又怠けやがるナ、何に言ッてやがったんだ、エエ、オイ（と山田に向って）生公、何の相談をしやがったんでイ」

「ウン、何も話なんか仕やし無えや」

「何ヨ、手前は一体生意気だぞ、オダ上げると焼きヨ入れてやるぞ、夫から手前達、今日は特別に早引けで五時限りにして遣るから、其跡で持場や、部屋の居廻りヨ念入りに片付けて掃除をしろ、夫からモ一つ言って置くがナ、手前達、物を言うにゃア、ようく後前ヨ考えてぬかせ、

ウッカリ顎叩くと飛んでも無え間違になるぞ、後で、吠え面かかねエ様にしろ、大事に使やア一生ある生命だア、勿体なくするな」

叱鳴続け、睨め付けてノソリノソリ往って了うと、

「一生ある生命には違ねえが、其一生が平均三ヶ月てんだ、晩かれ早かれで同じ事だ」

「然しあんなに駄目を押して、予防線をさすッてエなア何様せ例もの洞喝だろうが——奴等も大部こたえたらしいナ」

「オイオイ、夫れよりや早引けの掃除ッてなア、弥々明日になったんだぜ」

「それサ、己も先刻から其奴を言おうと思ってたんだ、何しろ難有てエ難有てエ、ア、助ったナア」

と歓喜の色は一同の顔に漲った。

（四）

山の幹部連中は前の晩から十何里距った汽車の着く町迄出迎に出かけて居る、留守は上飯台の連中が、取片付けに吾々を追廻し乍らも、口では夫れとなく、裏切りをすれば生命は無いぞと脅すのを忘れなかった。然も眉間の間には心配と反抗との混交った凄味を漂わせて居る。一方吾々下飯台の方は、幾月にも斯様なお手柔なこきつかわれ方に遭遇さないので、却て拍子

抜がして、変てこだが遖に嬉しさは顔や科に隠されぬ。殊に山田のハシャギ方は随分目につくので、何かなければ良いがと思わせる。

午前十一時頃、見張の者から巡察官の一行が二里程先の「五本松」の出端に見えたとの報せは、殆んど万歳を喚起す程の感激を生じた。

「エ、オイ、あと一時間だ。タッタ一時間だ」

中には髯だらけの顔の中に光ってる双の眼に涙をたたえ、夫れが葉末の露と髯に伝わる、という光景もある。

緊張の一時間、希望の六十分は直経過して、約四、五十人の出迎人に護衛された、官憲一行の馬車が到着した。

脚本「検察官」の幕切は、国王の権威を代表した官憲一行の到着を知らせる大礼服の士官が現われる所だったと記憶する。今は二十世紀、茲は日本国だけに厳めしい金ピカで無いから、何れも黒のモーニングに中折帽で、扮装丈では長官も属官も区別はつかぬ。山の主任連はフロックに絹帽子乃至山高で、親方連も着つけない洋服のカラーを苦にし乍ら、堅い帽子を少し阿弥陀に被ってヒョコスカ歩廻っては叱言を連発して居る、大分恐入ってる風に見える。

やがて、彼是十人計の一行は主任の先導で、休憩室に宛てられた事務所の二階へ歩を移した、其時に順になったので、役人の親玉と次席と其次位は判別できた。隊長は案外見立のない痩せ男だが、遖に怜悧想な、底光りのする眼付であった、次席に六尺近い、いい恰幅の、一寸関取

と言いたい様な体格の所へ、真黒な頬髯を蓄えてる丈に、実に堂々たる偉丈夫だ、只左の中指に太い印形付きの黄金指環が変に目についた、其次の男は中肉中背の若い男だが、体の科から、互の会話振から一人で切廻したがる才子風の所がアリアリと現われて居る。其後からは秩序もなく六、七人が随いてゆく。何れも威張れる所で精々威張り貯めて置こうという、マアマア罪のない連中らしい。

午餐がどんな御馳走だったか判らぬが、何れ小賄賂の意味で、出来る丈の珍味を並べたことだろう。今度は流石に今迄の様に変な女を御給仕に出すことは差控えたらしい。

午後一時に総員広場に集れの布令が廻って、時は愈目睫に迫った。山田は蒼白くなっては度々水で口を濡しながら「サア往こう」と昂然として言う。

三千人と一ト口に言うが、大したものだ、要所要所に上飯台の連中を配置し、寸分も足掻きを効かせまいと行届いた手配だ。然し此三千人の口には何様して手を宛てられるかと私は他人事ながら案じられて、背延びをして幹部の方を見たが、謹慎の象徴の様に固くなってるのが見えた丈だ。

山の主任が立上って、内務省から派遣された大河内参事官を紹介し、何か不平でも希望でもあらば申立てる様仰せられたから、其旨申伝えると述べて着席する。大河内参事官は、痩ッぽちの体に似合わず、吃驚する程の大声で訓示を始めた。良く透る歯切れのいい弁で、内容を平易く要領よく述立てる所は流石にと思わせた。当局に於いては虚心平気で実地の真情を審さに

調査報告し、改良すべき点ありと認むれば、飽迄も之が改善を命ずるのである、腹蔵なく述るがよい、世評が嘘伝であって欲しいと思うと述べた。

参事官が椅子につくかつかぬに、私から三人目に居た山田が、何か述立てようとすると、直後に見張って居た帝釈天の谷口が、後から肩口を握んで小突いた、すると壇上の椅子に居た次席の偉丈夫山本さんが突立上って、谷口を睨め底力のある声で叱り付けた。「君は誰か、何故発言を妨げるか、今参事官閣下の言われた事が判らんか止めなさい」

と威厳ある一ト睨で、帝釈天は凹んで面をふくらせたのは、溜飲が下った。山本さんは更に主任達の方を向いて、

「今の妨害者は当現場の監督者側の人とすると、此際彼の様な挙動は、貴方達に却て不利益ですぞ」

と決め付けた。主任と閻魔と閉口しつつ弁解がましく、述立てようとするのを耳にもかけず、

「今の発言者、遠慮なく述べなさい」

之に勢づいた山田は感激に満ちて滔々と述べた、如何に無道徳で、如何に残酷で、如何に悲惨であるかを、実例を引き引き巨細に訴えた。一同は山田が自分達を代表して弁じて呉れるとして肯定の色に満ち満ちた。続いて淫売殺しの木村も案の定立ち上って喋舌ったが、弁舌では山田に及ばないが、例証を挙げることの綿密なのには誰も彼も「よくマア」と感服した。無論陳述は属官が、一語も洩さず速記して居る。一方主任連の凹み方ッたら無い。

勢を得たので七、八人の者が続いて訴えたが、其了ったのは三時にもなっただろう。スルと参事官が立上って、大体要領は得た、更に何か変った、新しい方面の訴は無いかと尋ねた。

みんなが絶叫し、獅子吼したあとではあり、別に新しい種もないので、誰も口をきく者もなかったのに、一人の十八、九の若僧が出しゃ張って、何う変り栄えもせぬ事を、クドクドと東北弁で述べた時……実に其時だった……。

壇上の席に突ッ立上った大河内参事官閣下が、破れ鐘の様な大声で呶鳴った。

「黙りやがれッ、七ツくどいッ」

若僧は一縮になる、一同呆気にとられてポカーンとした儘、咳払い一つ聞えぬ。

「黙らねえか、五月蠅エや、何ンだ、言う事ア夫れッ切りか、下ら無エ同じ事をツベコベツベコベ、ぬかしやがって耳が草臥れらア、コウ手前達ア、此山に居ながら此山の讒訴をしやがって夫れで済むか、山にもナ、楠孔明が控えてらア、一番灰汁洗いを喰わせたんだゾ。俺は参事官でも四時間でも無エ、高間の初蔵という者だ。手前達の内に良くねエ企らみを為る奴があるので、偽勅使で一杯引ッ掛けたタア真逆に気も付くめエ、智慧の足り無エ癖に口許達者にベラベラ喋りやがって、今に其舌の根ッ子オ引ン抜いてやるから待ってろヨ。今手前達の言立てはすっかり速記にとってあるから夫について言抜は又幾何でも考えられらア、馬鹿野郎共め」

山本さんも立上って呶鳴った。

「獣め、口先計達者で、腕力も無けりゃ智慧もねエ、様ア見やがれ、オイ、閻魔ッ、今頬桁叩

きやがった餓鬼共ア、グズグズ言わさず――見せしめの為だ――早速片付ちまいねエ」

（五）

山田を始め七人の運命は、何の疑を挟む余地もなく、簡単に、礙滞なく、至極男性的に、明白に処断されたのは勿論である。

一週間後、内務省参事官の一行が、道庁の警察部長を先導に乗込んだ時には、気抜した萎けた被虐待者から、疑惑に満ちた冷眼で視られた丈で、一言の不平も、一片の希望も聴き取れずに引き上げた、而して本省への報告に、

「世間伝うる如き、所謂監獄部屋の虐待惨酷は、精査の結果、之を認むる能わず」

（〈新青年〉大正十五年三月号発表）

青空文庫情報

底本：「日本探偵小説全集11　名作集1」創元推理文庫、東京創元社
　1996（平成8）年6月21日初版
　1998（平成10）年8月21日再版
初出：「新青年」
　1926（大正15）年3月号
※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ケ」（区点番号5-86）を、大振りにつくっています。
入力：川山隆
校正：noriko saito
2007年12月9日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

監獄部屋

羽志主水

2026年10月1日　第二版

奥　付

発行　　青空文庫

URL　　http://www.aozora.gr.jp/
E-Mail　　info@aozora.gr.jp

作成　　青空ヘルパー　　赤鬼@BFSU
URL　　https://aohelp.club/
BiliBili　　https://space.bilibili.com/10060483

Special Thanks
　青空文庫　威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー http://aohelp.club/
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
http://tokimi.sylphid.jp/